

第26号

● 目次 ●

巻頭言：日ロ科学技術協力について	1
新任教員紹介	2
客員教授紹介	4
トピック	5
日本館だより	6
最近のセンター講演会	6
センター動向	7
活動風景	8

巻頭言

日ロ科学技術協力について

東北アジア研究センター教授 坂本 現 意

今年4月から客員教授を拝命しております。ロシアから日本に帰国したのが今年1月初めですが、まさか帰国後もロシア関係の仕事をするとは全く思ってもみなかったことでした。それが、1月中旬に研究センター長の平川先生からの突然の電話から、現在の自分があるのですが、今でも信じられない気持ちであります。

科学技術振興機構（JST）からロシア・モスクワにあるISTC（国際科学技術センター）に赴任したのは1998年7月ですから、丸6年半ロシアに滞在したことになります。ISTCは、日本、米国、EU等からの拠出金により、ロシア・CIS諸国の大量破壊兵器関連研究者の平和目的の研究プロジェクトを支援するために1994年に設立された国際機関で、現在は日本、米国、欧州、カナダ、韓国、ロシアCISからの総勢220名程のスタッフで構成される小さな機関ですが、様々な活動を行っております。プロジェクト関連事業とプロジェクト支援事業に分かれますが、小生の担当は、日本企業がロシア研究機関に研究委託するパートナー・プロジェクトの立ち上げ支援とジャパン・ワークショップ（JWS）の開催です。一言で言いますと、日本企業とロシア・CIS研究機関の橋渡しです。

ロシアの場合、どのようなプロジェクトが成功するのでしょうか。日本とは異なる考え方による新しい技術のプロジェクト、日本では人件費・研究コストの高いものを優れた技術力をもつロシア人研究者に委託すケースです。簡単な作業でも専門知識を持った研究者でなければ出来ない研究、また日本では環境的に出来ないが、ロシアにおいて実施出来るプロジェクトなども最適です。

それから、ロシア人研究者は独創性があり、問題にぶ

ち当たった時に創造的に解決しようとするので、これもロシア人研究者の優れた特徴の一つです。

最先端の技術は知識の集積ではなく、如何に突拍子もない独創的なことを考えつくか、ブレークスルーが出来るかにかかっております。日本人は、実用化等の応用研究が得意ですが、ロシア人は基礎研究が得意ですので、日本とロシアは正にベストパートナーです。

JWSは昨年末までに33回開催しましたが、この中6年半の間に約30回ほどのワークショップの企画・運営・開催を担当し、日本の産業界、研究者が関心を持つ科学技術分野のロシア人研究者を日本に招待して開催致しました。

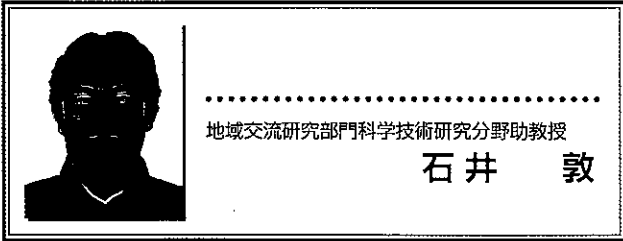
最後の2回のワークショップでは、特定技術テーマに関心のある複数の企業にロシア人研究者と共に1日1社ずつ訪問する直接訪問形式のJWSを行い、特に触媒のJWSでは、4件の具体的プロジェクト契約の成果を残しました。

現在、当大学CNEAS客員教授として、ロシア・ノボシビルスクの日本館を含めたCNEASにおける日ロ科学技術協力の活性化に少しでも貢献出来るよういろいろな提言・活動を行っていきたくて考えております。

以上、宜しくご支援のほどお願い申し上げます。



新任教員紹介



昨年10月から本センターの科学技術研究分野・助教授を奉職することになりました石井敦と申します。専門は環境政策論です。具体的には、環境問題や資源問題などの国際的なリスクに対処するためのリスク外交や、北朝鮮の環境問題をフィールドとして、政策科学と科学技術社会学の手法を融合した研究を進めています。

私はいわゆる、帰国子女です。日本に戻ってきたのは小学校3年生のときですが、小学4年生のある日、小学校の一角に私を呼び出した友人たちは、私にこう忠告したのです。

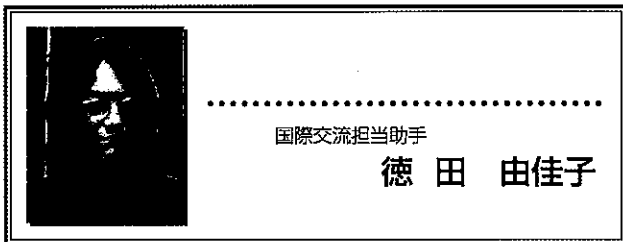
「もっと日本人らしくしたほうがいいよ。」

言われた直後は、みんなと同じにしたほうがいい、と忠告してくれたのだと思い、友人たちに感謝の念すら覚えていたのですが、その後、進学するにつれ、友人たちの忠告がとても怖いものに思えてきました。よく考えてみれば、当時小学校4年生の彼らに「日本人」とは何かということなど分かるはずもないのに、敢えて「日本人」という言葉を「みんな」の代わりに使ったことになりました。この違和感を言語化できたのはようやく大学生になってからでした。小学校4年生の友人に自

分の知らないはずの「日本人」という言葉を使わしめた日本社会とはいったいどういう社会なのだろうか、と。これが、私が研究者の道に進むことになった原体験です。

私は大の映画好きです。大ヒットした『マトリックス』は、その独特の世界観も話題をよびました。機械文明がさらに発達した時代、ある召使ロボットが自我に目覚め、殺人を起こしたことがきっかけで、人間対ロボットの世界大戦が勃発します。ロボットは太陽光発電による動力を得ていたの、人間側は地球を雲で覆いつくし太陽光を遮る作戦に出ますが、ロボット側は動力源を人間の生体エネルギーに切り替えることに成功します。映画のタイトルである「マトリックス」とは、生体エネルギーを吸い取るために眠らされている人間たちの意識に強制的に埋め込まれた仮想世界のことをさしているのです。

この映画が訴えたかったことは、「観客である貴方は現実世界に住んでいるかもしれないが、その現実世界も実は仮想世界であるマトリックスとそう変わるところがないのではないか」ということだと思います。友人たちが「日本人」という言葉を使わざるを得なかった理由は、彼らが認識させられていた日本社会という「マトリックス」にあるのではないのでしょうか。現実世界に流布している仮想世界の「マトリックス」を打ち破り、現実世界を規定する真の「マトリックス」とは何かを明らかにすることが研究なのだと思うのです。



昨年までは教務職員として、本年4月からは助手として本センターのお世話になることになりました徳田です。主に日本館（在ノボシビルス

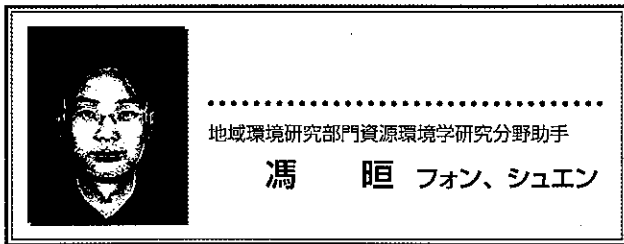
ク東北アジア研究センター連絡事務所）の管理運営およびロシアの科学技術情報の収集などを行っています。残念ながらこれまで科学技術に関し専門的に学んだ経験がなく深い知識に欠けるため、突っ込んだ情報を提供というよりはむしろ、現在ロシアではどのような研究が行われているのか、ロシアお薦めの新技術にはどんなものがあるのかを東北アジア学術交流懇話会会員の皆さんにご紹介し共同研究や開発などのヒントとしてご活用いただくことを目的としてや

ってきました。そのような情報の一部は本センターの刊行物アラカルト14号としてまとめられ、出版されておりますので東北アジア学術交流懇話会関係の皆様のお手元には既に届いているかと思えます。

現在、日本館のあるアカデムゴロドクには韓国科学技術研究院の事務所、世界的にも有名な家電メーカーとなったサムスンの事務所があり、頻繁に視察や共同研究、人材発掘などを目的としたノボシビルスク訪問団が組織されているといます。今、何かと注目されているロシアの経済特区プロジェクトに関連し、中国はロシアと共同でノボシビルスク、バルナウル、イルクーツクの3ヵ所にテクノパークを創設することになっているようです。また、ドイツはノボシビルスクに学術組織や企業の連絡事務所を持っていませんが、数年前に領事館を開設しました。ビザの取得が非常に容易になり、学術関係者は何の問題もなくドイツに行くことが可能になり

ました。一方、ノボシビルスク地方行政はハンブルグにオフィスを持っており、ドイツとノボシビルスク間では密接な交流が行われています。

日本館開設から7年の間に様々な国との交流を持ち、変化を続けているノボシビルスク（特にロシア科学アカデミーシベリア支部）は、ロシアが目指すハイテク経済のための戦略的地域として今後益々ヨーロッパやアジアから脚光を浴びることになるのは必至です。ロシアの科学技術についての情報収集は今後もちろん優先的に行っていきたいと考えておりますが、ロシアにはすぐ使える技術が少ないという見方もあってか日本ではあまり話題にならないシベリアについて、日本館での活動を通じ、競ってこの地に入り込もうとする他国の動きやロシア側の思惑、将来の展望などについても注意を払いロシア科学技術と併せて考えていくことで今までより一歩踏み込んだ見地で理解を深められるように努力していきたいと思えます。



6月から、東北アジア研究センター助手に着任致しました馮 暉です。私は、1999年中国・長春市にある長春科技大学にて工学修士を、2002年には吉林大学にて工学博士を取得しました。専門は、地球計測・情報処理技術です。博士取得後、吉林大学地球探査情報技術学院において、講師として勤務していました。2003年1月より、研究員として東北大学工学部に所属、同年3月より2年間、東北アジア研究センターにて研究機関研究員としてお世話になっていました。このたびの助手着任にあたり、引き続きよろしくお願ひ申し上げます。

私は、主に、弾性波伝播に関する研究、弾性波探査に関する信号処理、地中レーダ（GPR）に関する信号処理を行っています。弾性波伝播に関する博士論文「Nonlinear longitudinal wave before shock wave in homogeneous solid and its

application in the seismic exploration（均質固体中の衝撃波前非線形縦波の研究と弾性波探査におけるその応用）」により博士号を取得しました。弾性波探査の信号処理の分野では、1996－1999年に中国石油天然ガス集团公司（CNPC）によるプロジェクト「中国東部大陸辺縁部主要凹地構造と深部石油ガス探査の研究」に参加、1999－2000年には、大慶石油管理局地球物理探査公司による「高精度弾性波探査層－地質層同定技術の研究」において信号処理を担当しました。

現在は、人道的地雷除去活動に関連するSAR-GPRの開発、金属探知機および地中レーダのセンサー融合技術である地雷探知システムALIS（Advanced Landmine Imaging System）に携わり、地中レーダ（GPR）信号処理を担当しています。昨年12月には、佐藤源之教授とともに日本国際協力システムによるアフガニスタン現地地雷探知実験に参加しました。私にとって、初めてのアフガニスタンでしたが、人々の居住区と地雷埋設地が隣接している現場を目の当たりにし、高性能の地雷探知機の必要性をさらに強く感じました。地雷探知機の実用化を目標に、ここ仙台で研究に邁進したいと考えております。どうぞよろしくお願ひ致します。

客員教授紹介

ロシア科学アカデミーシベリア支部・動物分類学生態学研究所研究員 **ユルロブ, アレキサンドル**

西シベリアの南部の森林ステップの湿地帯は多くの水鳥が飛来する場所として知られているが、ここ50年ほど多くの種類の水鳥の数が大きく減少してきている。しかし、その原因が湿地面積の減少のみとは考えることはできないようである。ユルロブ客員教授は西シベリアの湿地の水鳥類を長年研究しており、現在動物分類学生態学研究所において鳥類研究グループの長として、水鳥類、とくにカモ類、チドリ類、カモメ類を中心として、その個体数を決定する要因について、気候や環境変化ばかりでなく、繁殖に係わる要因（一腹の卵数、卵サイズ、産卵率、巣立ちの数など）や種内・種間関係の影響について、色をつけた足輪で個体を識別する方法などを用いて詳細な研究を進めている。

ここで、その研究結果の一端を紹介することにする。いくつかのカモ類やチドリ類では繁殖を決定するものとして春の気候が最も重要であることが分かった。たとえば、春の気温の上昇が遅れるとある種のカモでは飛来しても産卵せず、巣作りの時期が1ヶ月も遅れることがある。そして、産卵時期が遅れると一羽の生む平均卵数が減少し、巣立ち数はさらに

大きく減少する。複数回産卵する種では、最も繁殖率がよい最初の産卵が遅れ、そのため平均産卵数が減少するとともに、産卵期間が短くなると巣作りの場所の取り合いも激しくなって、放棄される卵が増え、捕食者に食べられる卵数も多くなる。そのため卵の死亡率が増加し、巣立ちできた雛の数は平常年の1/10にも減少してしまう。結果として、成鳥の死亡率は少ないにもかかわらず、繁殖できた成鳥の割合は減少し、個体数の増加は少なくなる。この現象はカモ類のほか、チドリ類やアジサシ類にも見られる。このように、西シベリアはヨーロッパの他の地域に比べ、気候は鳥の繁殖にとってより厳しく、とくに春の訪れの時期が早いことが個体数増加にとって重要となる。

(菊地永祐)



繁殖コロニーの調査風景

上海社会科学院歴史研究所の研究員 **銭 杭 チェン、ハン**



銭杭先生は現在、上海社会科学院歴史研究所の研究員を務めておられる中国史の専門家である。1953年8月23日に上海市にお生まれになった銭先生は、1966年勃発の文化大革命の影響を、ちょうどその学齢期に体験された世代である。先生ご自身、「下放」による農村での労働体験を経た後、25歳で華東師範大学歴史系に入学された。その後は同大学大学院中国史学研究所に進学され、1985年に歴史学修士学位、1988年には歴史学博士学位を取得されている。そして、同大学院ご卒業とともに、上海社会科学院歴史研究所助理研究員に就任され、1990年には同研究所副研究員、1994年には研究員に昇任されて現在に至っている。

ご専門は古代から近現代に至るまでの中国の親族・家族制度、特に宗法と宗族組織についての研究である。主著に『周代宗法制度史研究』（1991）、

『中国宗族制度新探』（1994）、『伝統と転型：江西泰和農村宗族形態—一項社会人類学的研究』（1995）、『血縁與地縁之間—中国歴史的聯宗与聯宗組織』（2001）などがある。また、日本の学術書の中国語訳も手がけられ、瀬川昌久著『族譜—華南漢族の宗族・風水・移住』、田仲一成著『中国の宗族と演劇』などを翻訳された。

1995年9月から1998年4月には、金沢大学文学部・教育学部外国人教師として来日され、ご家族ともども約2年半を金沢で過ごされた。奥様は独身時代に職場の研修で2年ほど東京に滞在されたことから日本語に堪能で、また娘さんも現在、上海の大学の日本語科に在籍するなど、一家を挙げての知日派である。銭先生は目下、日本の家族制度史に関心をもたれ、東北大学図書館の狩野文庫などに入り浸られては、研究活動にいそしむ毎日を送られている。

(瀬川昌久)



センター・フェロー制度が制定され、 3人の方がフェローになりました

2005年度（平成17年度）から、本センターに多大なご功績のあった方に東北アジア研究センター・フェロー号称を授与することとし、この4月1日をもって3人の方がフェローになりました。

本センターでは、センター客員教授や共同研究などを通じて、センターの研究・各種業務に多大な貢献をされた国内外の優れた研究者の中で、センターに格段の理解を有し、将来も継続してセンターの研究、学術交流、各種社会貢献等において協力が得られる方にセンター・フェロー称号を授与するフェロー制度を制定しました。

お一人目（CNEAS-01）は、ロシア科学アカデミー・シベリア支部無機化学研究所長 Fedor Andreevich KUZNETSOV（フョードル・アンドレーヴィチ・クズネツォフ）先生です。先生はロシア科学アカデミー正会員としてロシアの無機化学研究をリードしてこられ、シベリア支部と本学の学術交流推進で

中心的役割を果たされております。1996年の本センター設置後、シベリア支部との交流関係において多大なご支援を賜り、無機化学研究所内のシベリア連絡事務所「日本館」設置、VSATシステム稼働、NOAA データ受信設備等々、本センターのシベリアにおける拠点形成と維持にご尽力いただいております。先生は本センター客員教授となられ、それ以前にも2度、本学客員教授となっておられます。

お二人目（CNEAS-02）は、東京大学社会科学研究所を定年退官後、同大学名誉教授、本センター客員教授になられた和田春樹先生です。

先生は、日本のロシア研究、朝鮮半島研究の第一人者として令名が高く、その学問のご業績は多数にのぼります。また、我が国を代表するオピニオンリーダーの一人でもあられます。センターの「東北アジア」地域研究各方面でご支援をいただいたのみならず、「東北アジア」という地域名称を定着させることが、この地域に対する我が国の国民各層の関心拡大にとって不可欠であるという、本センターの使命に関わる問題にも深いご理解を示され、多大なご支援を賜っております。

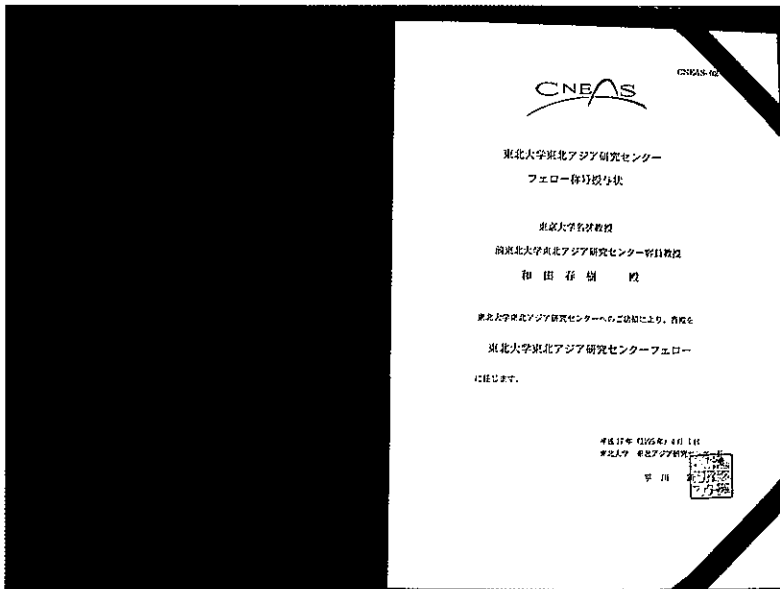
お三人目（CNEAS-03）は、日本鋼管（NKK）の研究所長・取締役・技監を経て、2001年1月

から2005年3月末までの4年3ヶ月、本センターの環境技術移転（NKK）寄附研究部門教授としてご尽力いただいた渡邊之先生です。先生は、鉄鋼技術者として、また優れた技術企画・評価者としてご高名であり、寄附研究部門教授在任中、その

力を存分に発揮されました。ロシア・中国等との技術交流を推進され、また優れた性能を有する感染性廃棄物処理炉を開発して地域貢献も進められました。これらの実績と、技術移転関係の実務経験に裏打ちされたご活動は、本センターにとって極めて貴重な社会貢献面の実績となっております。

以上、いずれも多大なご功績のあるフェローお三方に対して、改めて深く御礼申し上げますとともに、今後とも本センターへのご支援をお願いするものです。

（山田勝芳）



授与状の写真

日本館 便り

nihonkan-dayori

5月7日と8日にノヴォシビルスク国立大学で仙台の賀茂綱村太鼓が演奏を披露しました。これは以前からディカンスキー・ノヴォシビルスク国立大学学長が希望していたもので、東北大学の中島美樹子助教授（工学部）のご努力でようやく実現したものです。2000年の夏に東北大学で国際シンポジウムが連続で開催されましたが、その間外国の研究者を集めた懇親会が行われ、その場で太鼓の演奏が行われました。それを聴いたディカンスキー学長は感激し、ぜひ我が大学にも太鼓の演奏者を招きたいと考えたのです。太鼓は日本の伝統楽器ですが、歌詞がないため、外国人にも直に伝えることができ、感動を与えることができます。現在、ロシアだけでなく、太鼓の演奏は米国でもヨーロッパでも広く人気があり、宣伝の仕方によっては2000人規模の会場を満員にできるようです。

今回公演を行った賀茂綱村太鼓は、仙台で太鼓の伝統を守るうとする地元のアマチュア団体ですが、彼らがノヴォシビルスク大学の要請に応じて、太鼓を日本から持ち込み、演奏を行いました。全員で8名のメンバーでし



たが、推定平均年齢は25歳くらいで、若者の多いグループです。太鼓の演奏そのものもすばらしかったのですが、サービス精神も旺盛で、現地の聴衆への配慮も相当なものでした。最初の挨拶は、グループ代表の及川氏がロシア語で述べられました。これにはロシア人観客も感激していました。また、演奏プログラムの途中には、ロシアの民謡「カリンカ」と「トロイカ」を太鼓で演奏し、観客を驚かせていました。演奏は大成功に終わり、観客からアンコールを求められるほどでした。演奏終了後、ロシア人のために太鼓の手ほどきが行われていましたが、これにも多くのロシア人学生が参加し、太鼓の練習をしていました。

加茂綱村太鼓のホームページ <http://taiko-web.com/taiko/>
(塩谷昌史)

● 最近のセンター講演会

2004年度共同研究発表会

2005年4月11日(月)13:00より、2004年度共同研究発表会が開かれた。センターの共同研究は2004年度で終了した2テーマと現在進行中の8テーマがあり、それぞれ最終成果報告と中間報告が行われた。現在進行中のテーマの内、3テーマは2004年度より重点プロジェクトに指定されている。報告会終了後には30分ほどの総合討論の時間があった。今後の共同研究、共同研究発表会の進め方について活発な議論がなされた。



最終成果報告：

- 東アジア出版文化の研究
代表：磯部 彰
- 海南島の地方文化に関する文化人類学的研究
代表：瀬川昌久

中間報告：

- 東北アジア世界の形成と地域構造（重点）
代表：山田勝芳
- 前近代における日露交流資料の研究（重点）
代表：平川 新
- 白頭山東部における10世紀巨大噴火と遼・高麗王への歴史的影響（重点）
代表：谷口充宏
- 西シベリア塩性湖チャニー湖沼群の環境と生物群集に関する研究
代表：菊地永祐
- 図們江沿流居民生活誌の通時的共時的的研究
代表：上野稔弘
- ノア・データの利用による東北アジアの環境変動解析とデータベース作成に関する学際的研究
代表：山田勝芳
- モンゴル語資料の文献学的研究
代表：栗林 均
- 北アジアの環境・文化・歴史に関する総合的研究
代表：岡 洋樹
(菊地永祐)

ポスト社会主義世界の民族・文化・宗教

2005年4月22-23日の二日間にわたって開催されたこの研究会は、旧ソ連地域を中心に東欧・中国・モンゴルを対象にした多分野の地域研究者が集うものだった。一日目のセッションは、「ポスト社会主義地域研究の最前線」と題され、最新の現地調査・史料調査に基づく報告が行われた。その構成は、①中村知子（院・環境）「西部大開発実践下の人々——中国甘肅省を例に」、②杉本敦（院・文学）「<ルーマニア農村>に関する人類学的研究——その家族のあり方を中心に」、③滝澤克彦（院・文学）「ポスト社会主義モンゴルにおける宗教状況」、④染矢文恵（院・国際文化）「コサックとく山岳民」の関係にみる北カフカスの革命：1917-1921」、である。二日目のセッションは、「ポスト社会主義における民族学的知識の位相と効用」と題され、⑤藤原潤子

（日本学術振興会）「ポスト社会主義ロシアにおける呪術の復興」、⑥渋谷謙次郎（神戸大学）「帝国・民族自決・多文化主義——ロシアの多民族編成原理と民族政策の行方」、⑦佐々木史郎（国立民族学博物館）「ソ連民族学における人類社会発展史研究」だった。この研究会は、高倉が客員教員として代表を務める国立民族学博物館共同研究「ポスト社会主義における民族学的知識の位相と効用」が仙台で開催されることに伴い、東北アジア研共催として組織されたものである。東北大学において別々の研究科に分かれて学ぶ人類学・宗教学・歴史学等の院生の多くが一同に介し、全国各地から出席した共同研究メンバーと併せた26名によって活発な意見交換が行われた。

（高倉浩樹）

講演会「西シベリア南部の鳥類」

今年3月より東北アジア研究センターの客員教授としてセンターで共同研究を行っているロシア科学アカデミー・シベリア支部・動物分類生態学研究所のアレクサンドル K. ユルノフ博士の講演会が、6月14日（火）に本センター第二セミナー室で開催された。講演は、西シベリア地方南部の森林ステップおよびステップ湿地地帯が、南アジア、中東、アフリカ、ヨーロッパの渡り鳥にとって繁殖地や中継地、越冬地としての重要な場であることについて報告があった。特に絶滅危惧種が繁殖地として

いる8種の現状について説明があった。更に、気温や水位などの環境条件の違いや個体群の大きさが、水鳥の繁殖や生産性に与える影響について詳細なデータに基づいた解説があった。

（鹿野秀一）



講演するユルノフ氏

センター動向

■寄附研究部門

平成17年3月31日付で【環境技術移転（NKK寄附研究部門）】の期限が来たため廃止になりました。これに伴い

- 渡邊 之（ワタナベ、イタル）教授：環境技術
 - 甞 叶（ス エー）助手：環境政策
- 両先生が退職されました。

■現在の客員研究者

本年7月～9月の東北アジア研究センターの客員教授をご紹介します。

〈客員教授〉

【国内から】

- 坂本現意（サカモト、モトイ）教授：科学技術振興機構情報事業本部主任調査員、開発と社会変容研究分野
- 古畑 徹（フルハタ、トオル）教授：金沢大学文学部教授、東アジア・北アジア交流論研究分野
- 田村正行（タムラ、マサユキ）教授：京都大学大学院工学研究科教授、森林等の資源研究分野

【海外から】

- 銭 杭（チェン、ハン）：中国、上海社会科学院歴史研究所研究員、「家族・親族における出自制度—中日両国の比較研究」
 - 金 喜俊（キム、ヒジョン）：韓国、釜慶大学教授、「地下電磁計測による東北アジア環境計測評価に関する研究」
- #### 〈客員研究員〉
- Ookhnoi Batsaikhan（オーホノイ、バトサイハン）モンゴル、モンゴル科学アカデミー国際研究所研究員、「20世紀におけるモンゴルの独立と日本」
 - 朴 慶洙（パク、ケンシュ）：韓国、江陵大学校人文大学日本学科教授、「江戸時代の商品流通に関する研究」

■機関研究員

- 伊藤大介（イトウ、ダイスケ）：近未来の宮城県沖地震に備えた歴史資料保全のための調査研究
- 金谷 弦（カナヤ、ゲン）：西シベリア塩性湖チャーニー湖沼群の環境と生物群集に関する研究
- 嶋野岳人（シマノ、タクト）：白頭山東部における10世紀巨大噴火と遼・高麗王朝への歴史的影響
- 島山 禎（ハタケヤマ、タダシ）：ロシア・ソ連史および日露・日ソ関係に関する歴史文献学的研究

（北風 嵐）



清代モンゴル史研究における 公文書史料調査

東北アジア研究センター助教授 岡 洋樹

私の専門は東洋史、なかでも「清代モンゴル史」を研究テーマとしている。モンゴルは、チンギス・ハーンが世に現れた13世紀以来800年の歴史をもつが、「清代モンゴル史」というのは、そのうち清朝がモンゴルを支配した17世紀から20世紀初頭にかけての時期を指し、モンゴル史全体の中でもちょっと特異な研究領域である。一般に前近代の遊牧民の歴史を研究しようとする時、常につきまとうのが、史料の絶対的な欠乏の問題である。モンゴルの場合は建国当初から文字を持ち、現在に至るまでウイグル式モンゴル文字・パスパ文字・トド文字、さらには漢字・チベット文字などを用いたモンゴル語史料が残されているが、文献の数では中国の漢文史料には遠く及ばない。ところが清代ではやや事情が異なり、かなり大量のモンゴル語文献が残されているのである。その中には、歴史書（年代記・中国の歴史書の翻訳など）・宗教文献（仏典・祭祀文など）・文学（英雄叙事詩・翻訳ものなど）・道徳規範（教訓書など）が含まれるが、中でも重要なのが公文書である。モンゴルでは、この時代、清の支配下で盟・旗と呼ばれる行政組織が整備され、大量の文書が作られ蓄積された。しかもかなりの文書が現在まで保存されているのである。モンゴル国の場合、国立公文書館がその主要な所蔵機関で、ほかに国立図書館でも清代の文書史料を見ることができ、また中国内モン古档案館などにも文書史料が残されている。その多くがモンゴル文か満洲文（清朝の「国語」）である。モンゴル現地で作られたこれらの文書史料から我々は、当時の遊牧社会の様子を具体的に知ることができる。このようなことは、モンゴル帝国時代も含めて清代以前には到底考えられない。もちろん清朝の中央政府も、300年にわたってモンゴルを支配し、モンゴルに関して多くの文献を残した。特にモンゴル行政を担当した理藩院と呼ばれる官庁の法典である『理藩院則例』や、モンゴル王公の伝記『欽定外藩蒙古回部王公表伝』など、それ以前に比べると桁違いの史料がある。文書史料も、主としてモンゴル各地に駐在した将軍・大臣からの上奏文などの満洲文の文

書が、中国第一歴史档案馆などに大量に存在する。しかし中央が編纂した史料や文書は、モンゴルの基層社会内部の様子を伺うにはどうしても限界がある。だから、当時の遊牧社会の様子を直接具体的に知るための史料として、モンゴル現地の文書史料の価値は計り知れない。

モンゴル国の場合、1990年代の民主化まで、公文書館はいわば開かずの扉であった。外国人である我々はもちろんのこと、モンゴル国の研究者にとってさえ、必ずしも自由に利用できる施設とは言えなかったようである。それが90年代半ばから一般に開放された。筆者もモンゴルを訪れるたびに公文書館に通って調査しているし、最近是国内外の研究者や大学院生たちが、文書史料を閲覧し、研究論文作成に利用するのが、普通のことになりつつある。調査に際して筆者は、本学と協定を結ぶモンゴル科学アカデミー歴史研究所にはいつも受け入れ先として紹介の労をとってもらっている。史料の多さに比べて、研究者の数はまだ多いとは言えないが、文書史料の研究によって、清代モンゴル社会のイメージは少しずつ変わり始めている。2003年9月には清代の研究者を中心として、ウラーンバートルで本センターと歴史研究所共催の「モンゴル史の諸問題——歴史学と民族学からのアプローチ」と題する小さなシンポジウムを開催し、その報告をモンゴル語で刊行したが、報告の多くが清代文書史料を用いたものだった。活動としては地味なものではあるが、このような史料調査と研究交流を積み重ねながら、清代モンゴル史研究の発展に少しでも寄与できればと考えている。



モンゴル国立公文書館所蔵の清代史料



モンゴルでのシンポジウムの様子
(2003年9月15日、モンゴル日本センター)

編集 後記

新年度になり広報情報委員会メンバーも入れ替わりました。本年度はセンターに新しく加わった教員、研究員、客員教授の方々の研究やプロフィールをできるだけお伝えしていこうという編集方針を立てました。新しい紙面をご覧ください。
(佐藤源之)